Memoirs of Beppu University ,43(2001)

「エッセイ」の「発見」とサー・トマス・ブラウン

河野　豊

はじめに

一般に、「エッセイ」の歴史はモンテーニュ（Michel de Montaigne, 1533–92）とともに始まったと言われる。彼が、「私が描くのは私である」、「私自身が私の書物の題材である」と述べたとき、「エッセイ（essay）」というものが生まれた。[1] その後「エッセイ」はイギリスで発達し、19世紀のチャールズ・ラム（Charles Lamb, 1775–1834）に至って、完成を見た、というのが普通の文学史の記述である。その間に、これから述べるサー・トマス・ブラウン（Sir Thomas Browne, 1605–82）を含めて、イギリス文学史において、様々な「エッセイスト」が現れる。小論は「エッセイ」の歴史を再検討し、その歴史の中にサー・トマス・ブラウンを位置づけることを目的とする。

1

まず「エッセイ」の歴史を再検討することから始めよう。前述のように、「エッセイ」はモンテーニュをその創始者とするというのが文学史の常識である。彼は『エセー』（*Essais*, 1572–80, 88）という書物を書くことによって、「エッセイ」を文学の一ジャンルとして創始した、と普通言われている。しかし、この文学史の常識を果たして文字通りに受け取っていいのであろうか。モンテーニュは『エセー』の中で、実に様々な主題について書いている。それは『エセー』冒頭の「読者に」の中にある彼自身の言葉、「私が描く対象は私自身」、「私自身が私の書物の題材なのだ」という言葉から我々が連想できる範囲を大きく超えている。それらの言葉は、いわゆる作家の身辺雑記としてのエッセイ、随筆、随想を暗示させる。しかし実際には、内容は神学であり文学であり道徳であり哲学である。「読者に」の言葉と『エセー』という書物の内容との懸隔は極めて大きいと言わねばならない。このことをどのように考えたらいいのだろうか。一つの仮説として、モンテーニュは「エッセイ」を書いたのではないのではないか、ということが考えられる。つまり、我々が今日普通に考えるジャンルとしての「エッセイ」というものはモンテーニュの念頭にはなかった、ということである。「エセー」という語は元来「試み、吟味」を意味する語である。モンテーニュの書いた『エセー』という書物は、「エッセイ」ではなく、「試み」なのだ。モンテーニュは自分が書いた様々な主題に関する文章を一冊の書物として刊行するにあたり、「試み」という書名をつけたのである。書名の『エセー』はジャンルとしての「エッセイ」を指すのではなく、モンテーニュが書いた一つの書物だけを表わす一回限りの固有名詞と考えなければならない。

それでは、その書名＝固有名詞としての「エセー」はどのようにして文学の一ジャンルとして

の「エッセイ」になったのであろうか。それはベーコン（Francis Bacon, 1561-1626）によるところが大きい。ベーコンは、1597年に *The Essayes, or Counsels Civill And Morall* を出版する。その第二版の献辞の原稿の中でベーコンは次のように述べている。

> ...certain brief notes, sette downe rather significantlye, then curiously,which I have called *Essaies* ; the word is late, but the thing is auncient. For Senecaes *Epistles* to Lucilius, if one marke them well, are but *Essaies*,—That is dispersed Meditacions....[2]

この一節で、ベーコンは、「エッセイ」という言葉は最近のものだが、実体は古くからあったと言い、例として、セネカの書簡を挙げている。ベーコンがモンテーニュの『エセー』を踏まえて書いているのは明らかである（『エセー』の初版は1580年）。つまり、モンテーニュが書いた文章をモンテーニュ自身が「エセー」と呼んだのを受けて、ベーコンは彼自身の作品を英語で「エッセイ」と名付けた。[3]　そしてベーコン自身の認識では、実体はローマ時代からあった、と言っているのである。言い換えれば、「エッセイ」という名が与えられることによって、モンテーニュ以前のある種の作品が、「エッセイ」として見直される、あるいは読み直されることになったのである。このことは、例えば、20世紀半ば、サルトルやカミュなどの実存主義に基づいた作品を書く作家が出てきたことで、キルケゴールやカフカがその先駆者として見直されたことと似ている。また、別の例を挙げれば、20世紀初頭、「意識の流れ」の手法に基づく作品が出てきたことで、18世紀のローレンス・スターン（Laurence Sterne, 1713-68）がその先駆者として見直されることになったことも同様であろう。つまり、「エッセイ」という表現の器ができたことによって、中身もまたその器に盛られることになったのである。従って、逆にその器に合致する内容ならば、遡及的に「エッセイ」として捉え直されるということが起きてくるのも当然と言えよう。文学史をそのように見ることはエリオットの言葉を想起させる。エリオットは、次のように述べている。

> 現在残っている著名な作品はおたがいのあいだに理想的な秩序を形成しているが、この秩序は新しい（ほんとうに新しい）芸術作品がそこへ入ると変更されるのだ。現在ある秩序は新しい作品があらわれないうちは完結しているわけだが、目新しい作品が加わった後でも持続したいというなら、現在ある秩序全体が、たとえ少しでも、変化を受けなければならない。こうして一つ一つの芸術作品が全体に対してもつ関係やつり合いや価値が修正せられていく。これが古いものと新しいものとの順応なのである。ヨーロッパ文学とイギリス文学の形態についてこの秩序の観念を認めたものはだれでも、現在が過去によって導かれるとおなじように、過去が現在によって変更されるということをさかさまだとは考えないだろう。[4]

従って、繰り返して言うならば、16世紀に書かれたモンテーニュの作品『エセー』が、エリオットの言う「目新しい作品」であり、それによって、「全体」が修正されるということになる。その結果として、「エッセイ」というものが「発見」されたのである。例えば、テオフラストス（Theophrastus, c.372-c.287B.C.）、セネカ（Seneca the Younger, c.4 B.C.-65 A.D.）、プルタルコス（Plutarch, c.46-c.120）、マルクス・アウレリウス（Marcus Aurelius, 121-180）等の著作がエッセイとして「発見」されたのである。

しかし、モンテーニュの後でベーコンが前述の引用にあるような認識を示しただけで、「エッセイ」というジャンルは確立したのであろうか。確かに「エッセイ」という器はできたが、それ

はまだ不完全な器であったと思われる。もちろん、何が「完全な器」であるのかについては異論の余地があるが、ここで「不完全」という言葉を使ったのは、19世紀のチャールズ・ラムを念頭に置いているからである。ラムの「エッセイ」を「完全」な「エッセイ」、あるいは、現代の「エッセイ」の典型と見なすならば、ベーコンの「エッセイ」は、モンテーニュの『エセー』と同様に、「試み」であった。英語の「エッセイ（'essay'）」という語が、語源的には中期フランス語 'essayer'（試みる）から来ていることからもわかるように、ベーコンはその語を決してラムが書いたような「エッセイ」の意味では使っていない。ラムのような「エッセイ」はまだ存在していなかったから当然であろう（モンテーニュの『エセー』にはラムが書いた「エッセイ」に通じる要素があることは否定しない）。

それでは、次に考えなければならないのは、16世紀のモンテーニュやベーコンの「試み」としての「エッセイ」から、19世紀のラムのジャンルとしての「エッセイ」へと致るまでに何があったのかということである。それを述べる前に、まず、モンテーニュとベーコンのエッセイの特徴を再確認しておこう。

彼らのエッセイは同じ「エッセイ」というタイトルを持ってはいるけれども、一般には、モンテーニュのエッセイが、'personal' であり、'informal' であり、'private' であるのに対し、ベーコンのエッセイは、'impersonal' であり、'formal' であり、'public' であると言われている。また、彼らのエッセイを明確に区別して、「ベーコン的エッセイとモンテーニュ的エッセイとがあった」と言う者もいる。[5] しかし、前述のように、モンテーニュは「私自身が私の書物の題材である」と書いてはいるけれども、内容はベーコン同様、神学、哲学、道徳等に関するものであった。モンテーニュの『エセー』が、'personal' であり、'informal' であり、'private' と言われる所以は、内容のためではなく、その表現の方法によるところが大きいと見るべきである。表現の方法という言葉は、「語り方」と言い換えてもよいであろう。その観点からすれば、ベーコンのエッセイも、確かに内容は 'impersonal' であり、'formal' であり、'public' であると言えるが、「語り方」は、紛れもなくベーコン自身のものである。ベーコンの「エッセイ」を読む者はそれが他の誰でもなく、まさしくベーコンという人間によって書かれたということを意識せざるをえないであろう。彼らの「エッセイ」の相違は彼らの語り方によるところが大きいのであり、個人の資質の差であると言ってもよいのではないだろうか。従って、彼らのエッセイは、一般に言われているほど懸け離れたものではないということになる。つまり、彼らの「エッセイ」は内容の点から見れば、同じように「試み」としての「エッセイ」であり、ラムの「エッセイ」とは根本的に異なると言えよう。

それでは、ラムの「エッセイ」というものは一体どのようにして生まれたのであろうか。以下、文学史では周知のことではあるが、論の展開のために簡単に要約しておこう。

16世紀後半の1592年にテオフラストゥスの『人さまざま』（*Charaktēres*）のラテン語訳が出版された。そしてそれは1599年にも出ている。そのことからそれが当時の知識階級の人々に人気があったことがわかる。その出版の年代はモンテーニュの『エセー』やベーコンの『エッセイ』以後であることに注意したい。1603年にはモンテーニュの『エセー』もジョン・フローリオ（John Florio, 1553？-1625）による英訳が出版された。当時において、彼らの「エッセイ」の類が多くの人々に読まれており、似たようなものを求める声があったと言えよう。そしてテオフラストゥスの『人さまざま』を模倣あるいは改作した著作が数多く出版されたのもそうした人気を物語っている。それらは一般に "character sketch" と呼ばれ、"Our English Seneca" と称されたジョゼフ・ホール（Joseph Hall, 1574-1656）の *Characters of Vertues and Vices*（1608）、サー・トマス・オーヴァベリー（Sir Thomas Overbury, 1581-1613）の *Characters*、John Earle（1601？- 65）の *Mi-*

crocosmographie（1628）などが出ている。それらは人間の性格を分類・描写したものであり、そこに表われているのは、モンテーニュにも見られたルネサンス以降の人間への深い関心である。17世紀は、そうした "character sketch" が流行した時代であった。上記の著作が大いに版を重ねたことからもそれは明らかであろう（Hall の本は1665年までに十版を重ねた）。フランスでも、ラ・ブリュイエール（Jean de La Bruyère, 1645–96）が、テオフラストゥスの『人さまざま』を仏訳した上に、自らの文章をつけ加えた『カラクテール』（*Les Caractères de Théophraste traduits du grec, avec les caractères et les moeurs de ce siècle*, 1688）を出版し、版を重ねた。そうした著作が流行した理由の一つは、17世紀が論争の時代であったからである。政敵、論敵を批判するのに "character sketch" という形式が利用されることになったのであった。

"character sketch" には、二つの種類がある。テオフラストゥスが書いたような個々の人間を一般化したものと、プルタルコスが書いたような特定の個人（特に英雄）を描写したものである。実際にはこの二つは混ざり合わさることが多かったが、いずれにしても"character sketch"が目指したものは、人間とはどのような存在であるのかを明らかにし、どのように生きるべきかをわかりやすく説くことであった。そしてそれは、一方では、後のアディソンとスティールらの「エッセイ」に、他方では、「伝記」と「自伝」へとつながっていくことになる。

17世紀には、他にも、カウリー（Abraham Cowley, 1618–67）の *Several Discourses by Way of Essays, in Verse and Prose*（1668）、セルデン（John Selden, 1584–1657）の *Table Talk*（1689）などが出版され、ジャンルとしての「エッセイ」の確立に寄与した。

18世紀になると、市民社会が成立とともに、ジャーナリズムが発展し、さまざまな内外のニュースを伝えるようになる。読書人口も増え、人々は「面白くてためになる」話を求め、ジャーナリズムはそれに応えていった。アディソン（Joseph Addison, 1672–1719）とスティール（Sir Richard Steele, 1672–1729）は、新興の読書階級のために、*The Tatler* と *The Spectator* を創刊し、読書欲をかき立てると同時に、市民社会における人の生き方を論じた。彼らが、*The Tatler* や *The Spectator* に寄稿したさまざまな文章は、19世紀にラムが書いた「エッセイ」へと引き継がれる。また彼らの影響は、ジョンソン（Samuel Johnson, 1709–84）の *Rambler*（1750–52）や *Idler*（1758–60）、ホークワース（John Hawkesworth）の *Adventurer*（1752–54）、ドズリー（Robert Dodsley）とムーア（Edward Moore）の *World*（1753–56）を生み出した。そうした雑誌・新聞は古典的な韻文よりも散文に重きを置いたので、古典的素養のない人々も容易に読めるものであった。従って、広い階層から人気を博し、ますます部数を重ねることになった。

アディソンとスティールの「エッセイ」の特徴は、前述の "character sketch" の発展として、架空の人物（character）を登場させ、彼らにさまざまな意見を語らせるということである。それによって、アディソンとスティールは大衆を教化し、「良き市民」としての生き方を示すことを望んだ。そのことは、アディソンの "I have brought Philosophy out of Closets and Libraries, Schools and Colleges, to dwell in Clubs and Assemblies, at Tea-Tables and in Coffee-Houses"（*The Spectator*, No.10）という言葉によく表われている。架空の人物を登場させ、彼らに自分の考えを語らせるという手法は、イギリスのエッセイの特徴の一つであり、それは他方では小説の発展を促すことにもなる。

18世紀の「エッセイ」の歴史において特に触れておく必要があるものは、ジョンソンの英語辞書（*A Dictionary of the English Language*, 1755）の中の "essay" の定義である。それによれば、"essay" とは、以下の通りである。

1. Attempt; endeavour.

2. A loose sally of the mind; an irregular indigested piece; not a regular and orderly composition.
3. A trial; an experiment.
4. First taste of any thing; first experiment.

定義としては、意味が重複している部分があり、十分なものとは言えないが、この定義から明らかなように、「エッセイ」の意味としては、「試み」と「作文」の二つがあり、後者が後に文学の一ジャンルとして発展する「エッセイ」の萌芽であることがわかる。このジョンソンの定義は以下の *Oxford English Dictionary* (*OED*) の "essay" の定義に引用されている(8)。

I. The action or process of trying or testing.
†1. A trial, testing, proof; experiment; = ASSAY *sb*. 1,3. *Obs*.
†b. *spec*. The trial of metals; = ASSAY 6. *Obs*.
†2. A trial specimen, a sample, an example; a rehearsal. Cf. ASSAY 17. *Obs*.
†3. *Venery*.
a. = ASSAY 9. In phrase *to take essay*.
b. *concr*. The part of a deer in which trial was made of the 'grease'; the breast or brisket.
†4. A taste, or first taste, of food or drink presented to a great personage; = ASSAY 12. *Obs*. exc. *Hist*.
II. A trying to do something.
5. An attempt, endeavour. Const. *after*, *at*, † *of*, *on*, *towards*, and *to* with *inf*.
b. *concr*. The result of an attempt. *nonce-use*.
†6. A hostile attempt. *Obs*.
†7. A first tentative effort in learning or practice; = ASSAY 16. *Obs*.
b. A rough copy; a first draft.
8. A composition of moderate length on any particular subject, or branch of a subject; originally implying want of finish, 'an irregular undigested piece' (J.), but now said of a composition more or less elaborate in style, though limited in range.
The use in this sense is app. taken from Montaigne, whose *Essais* were first published in 1580.
III. 9. Phrase, *in all essays*: under all circumstances. *Obs*. Cf. ASSAY 21,22.
10. *attrib*. and *Comb*., as *essay-weaver*, *-writer*; also essay-hatch (see quot.); essay-scale, a test-scale.

上記二種類の定義を比べてみると、ジョンソンの定義の中の(1)と(2)だけが現在でも通用していることが見て取れる。また、同じく *OED* で "essayist" を引けば、以下のように出ている。

1. One who essays, one who makes trials or experiments. Const. *of*. Now *rare*.
2. A writer of essays.

定義(1)の初出は1736年、(2)は1609年で、(2)の初出例としてベン・ジョンソン (Ben Jonson, 15

72–1637）の劇作品、*Epicœne : Or, The Silent Woman*（1609）の登場人物であるジョン・ドーのセリフが出ている。それは第二幕第三場の "meere Essaists! a few loose sentences, and that's all." というものである。ベーコンの *The Essayes, or Counsels Civill And Morall* の出版（1597年）から十二年後、モンテーニュの『エセー』のフローリオによる英訳の出版（1603年）からわずか六年後に劇作品の中で "essayist" という言葉が用いられているのは、元になった "essay" という言葉がいかに急速に浸透したかを示していると言ってよいであろう。また、逆に、"essay" という言葉が社会によって求められていたとも言えるであろう。ベン・ジョンソンは、プルタルコスやセネカを評して、"meere Essaists!" と、ドーに言わせている。そのことから、ベン・ジョンソンはベーコン同様、セネカを「エッセイスト」として認識し、加えて、プルタルコスも同様に見ていたと言える。ドーは、引用したセリフの少し後で、ギリシャ・ローマの古典作家や哲学者を軒並み馬鹿にする。そういう人物から馬鹿にされることは、却ってそれらの古典作家や哲学者の偉大さを示している。しかし、ここでは "Essaists" という語が軽蔑的に使われていることに注意したい。ドーは、自作の詩を朗読した後で、周りの人々から、プルタルコスやセネカのようだと言われ、それに異議を申し立て、彼らは "meere Essaists!" だと言っているのである。それは散文よりも詩の方が高い地位にあるという主張であり、歴史的に見れば間違ったものではない。更にそのセリフの後で、プルタルコスやセネカの著作のようなものは誰でも書けるという趣旨のことを言っている。つまり "essay" は誰にでも書けると言っているのである。いいかげんな人物であるドーの言うことは当てにはならない。それはおそらくベン・ジョンソン自身とは正反対の認識であろう。しかし、その認識の是非はともかく、そういう認識をもつことができるという、そのこと自体が、"essay" というものがいかに広まっていたかを逆に示している。もちろん、ここでの "essay" は、ラムが書いたような「エッセイ」ではなく、「試み」としての「エッセイ」であり、「語り方」は、モンテーニュのようなものを指すと思われる。

"Essaists"という語が、そのように軽蔑的に使われるということは、その当時、ものを書くべきスタイルが既に確立しており、「エッセイ」はそのスタイルからの逸脱であるという認識があったことを示しているのかもしれない。つまり、「エッセイ」とは新しい「語り方」をもつものであったと言えるのではないだろうか。

18世紀におけるジャーナリズムの勃興は、読書人口の急激な増加を招来すると同時に、売文のみによって生きていく人々を生み出した。そうした人々が書く「エッセイ」は、個人的なものというよりも、アディソンやスティールのように、読者を意識した、もっと社会的な、啓蒙的なものとなっていく。そして「売れる」ということを考えなければならなくなる。そうした言わば「読者による支配」からの脱却を目指したものが、いわゆる「ロマン主義」であり、そこに表われているのは、端的に言えば、作者の絶対化である。とは言え、いったん進んだ商業化が逆転することはあり得ず、作者は、自らの作品に自己を投影しながら、作品を売って生きていくということを強いられる。そうした状況で出てくるのが、チャールズ・ラムである。

もっともラムは文筆のみによって生活していたのではなく、晩年の数年間を除いて東インド会社に勤務していた給与生活者であり、雑誌への寄稿は言わば副業であった。副業とは言え、ラムの文学的名声は、主にそのエッセイに負っている。そして、何度も述べてきたように、ラムの「エッセイ」こそ、「エッセイ」を文学の一ジャンルとして確立し、定義づけしたものであった。その特徴は次のようなものである。ラムは、「エリア」という架空の人物に自己を仮託して、その人物に自己の意見を代弁させる。そこでは演技しながら自己を語るラムとありのままの自己を語るラムとが共存する。「エッセイ」の目的も、アディソンやスティールのような社会的なものではなく、親しい友人（＝読者）に個人的な意見を直接語りかけるということである。しかも決し

て大上段に構えず、相手を説得することに躍起にならない。つまり、ラムのエッセイは筆者の意見の単なる伝達手段ではない。意見の押しつけでもない。そこにおいて重要なものはその「語り方」である。ラムは自分でも自分の意見に自信がないかのようである。相反する意見を併置し、判断は留保する。ラムが、と言うより、エリアが本当には何を考えているのかは推測は可能でも判然としない。さまざまな意見の提示に終始することが多い。ラムは何事も理解し尽くすということがない。常に反論の余地を残しておく。二つの意見を戦わせてどちらかに軍配を上げることはしない。独り言ではなく、一つの声による対話である。

こういった特徴をラムの「エッセイ」は持っており、ということはそれはそのままジャンルとしての「エッセイ」の特徴となる。自分が書いた書物をモンテーニュが「エセー」と呼び、その「語り方」から、ベーコンがいち早く本質を認識した「エッセイ」は、ここに至って、現代の意味をもつようになったのである。「モンテーニュの『エセー』にはラムが書いた「エッセイ」に通じる要素がある」と前述したのは、モンテーニュとベーコンの二つの「語り方」のうち、ラムはモンテーニュの「語り方」の方を選んだからに他ならない。また、「エッセイスト」を意味するフランス語の "essayiste" は英語に由来することから、「エッセイ」というジャンルはフランスではなく英国で確立したと言ってもよい。その立て役者がラムであった。

2

以上、「エッセイ」の歴史を再検討してきたが、それではブラウンはどのような位置づけが可能なのであろうか。

ブラウンが生きた年代は1605年から1682年であり、英国には既に「エッセイ」という言葉が入っていた時代である。しかし1で見たように、それはまだジャンルとして確立してはいなかった。1635年頃書かれたと推定されている『医師の信仰』(*Religio Medici*, 1643) の序文とも言うべき「読者に」の中で、ブラウンは、その本が "my private exercise and satisfaction"、"personall expressions"、"the intention was not publik"、"a private exercise directed to my selfe" であると述べている。[6] これらのくどいほどの言葉から直ちに連想されるのは、同じ「読者に」を書いたモンテーニュである。先に、モンテーニュの『エセー』は 'personal' であり、'informal' であり、'private' であると書いたが、ブラウンの「語り方」はそれをそのまま繰り返したような表現である。

『医師の信仰』の出版後しばらくして、ブラウンとモンテーニュの類似点を指摘する注釈者が現われた。[7] ブラウンがモンテーニュの『エセー』を読んでいたのは確かである。ただ、『医師の信仰』を書いたとき、ブラウンは、彼の言葉を信じるならば、それを「六ページも読んだことがなかった。」[8] その言葉を疑う理由はない。とすれば、その類似性は、個人の資質及び時代の要請の結果と言えるだろう。

「読者に」によれば、『医師の信仰』という著作を出版する意図はそもそもブラウンにはなかった。[9] 従って、おそらく元来は覚え書のような形で書き留められたものであろう。『医師の信仰』の執筆の意図はブラウン自身の宗教観を明らかにすることであった。医者には無神論者が多いという世評に対する弁明と言ってもよい。しかし、それは単なる弁明にとどまらず、自らの来歴であり、宗教観以外に、世界観、人間観の表明でもある。自らも数多くの「エッセイ」を書いたヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882–1941) は、ブラウンのことを "the first of the autobiographers" と呼び、"he was a character, and the first to make us feel that the most sublime speculations of the human imagination are issued from a particular man, whom we can love" と述べている。[10] その意味でブラウンは、"character sketch" が流行していた時代に自らの "charac-

ter sketch" を書いたと言える。『医師の信仰』はブラウン自身を語ったものであり、ウルフが述べているように、一種の「自伝」でもある。[11]　もちろん当時は「自伝」というジャンルも「エッセイ」同様、スタイルとして確立していたわけではなかったから、ウルフの言葉も後世の視点から見たときの評価に過ぎない。前述したエリオットの言葉に従えば、ブラウンは「自伝」を書いたのではなく、現代から見れば「自伝」に相当するようなものを書いた、と言うべきであろう。それは、当時流行していた "character sketch" という、文章を書くための枠組みに従って書いた結果である。そして、そのことはモンテーニュとベーコンによって「試み」が書かれたことによって、後のジャンルとしての「エッセイ」が生まれたことと関わってくる。ブラウンが書いたものは、未生の「エッセイ」と、同じく未生の「自伝」とが、未分化のままに、ないまぜになったものであった。その中から、後の「エッセイ」となる要素をすくい取り、醇化した者がラムである。

ラムは、『エリア随筆集』（*Essays of Elia*, 1823）の中で、次のように述べている。

> C. will hardly allege that he knows more about that treatise than I do, who introduced it to him, and was indeed the first (of the moderns) to discover its beauties....[12]

ここでの"that treatise"とは、『医師の信仰』ではなく、『壺葬論』（*Hydriotaphia, Urn-Burial, or, A Brief Discourse of the Sepulchral Urns lately found in Norfolk*, 1658）のことであるが、ラムがブラウンをいかに読んでいたかは、*Essays of Elia* の中で、何度もブラウンの著作に言及していることから明らかである。ラムの人生そのものがブラウンの影響を受けていると言う者さえいる。[13]

自らをブラウンが書いた著作の「美を発見した（近代人の中の）最初の人間」と誇るラムは、ブラウンの中に、美ばかりではなく、「エッセイ」を「発見」したのである。ブラウンの中には次の時代に「エッセイ」へと発展するべきものが内在していた。それは「エッセイ」を完成させたラムがブラウンの再発見者であったということに表われている。すなわちラムは、ブラウンの中から自分が書くべきものを読みとったということになるであろう。その意味で、ブラウンは、ラムによって「エッセイ」の歴史の中に大きな位置を与えられたと言ってよい。

註

1　ミシェル・ド・モンテーニュ著原二郎訳『エセー（一）』（岩波書店、1965）、9。

2　福原麟太郎編『ベーコン』世界の名著20（中央公論社、1970）、8。

3　16世紀末に出たコーンウォリス（Sir William Cornwallis, 1579–1614）の *Essayes*（1600, 1601）も、ベーコンの著作同様「エッセイ」が「試み」であることを示している。

4　T.S. エリオット著矢本貞幹訳『文芸批評論』（岩波書店、1938；改版1962）、10。

5　福原編、前掲書、9。

6　*Sir Thomas Browne: The Major Works*, ed. C. A. Patrides (Penguin, 1977), 59.

7　1656年版の『医師の信仰』に注釈を書いた Thomas Keck である。

8　Sir Geoffrey Keynes (ed.), *The Works of Sir Thomas Browne*, 2nd ed., vol.3 (Faber & Faber, 1964), 290.

9　『医師の信仰』が出版後直ちに版を重ねたのも、時代の要請に合致していたことの表われと見ることができよう。

10　"The Elizabethan Lumber Room", in *The Common Reader* (Hogarth Press Ltd, 1925; rep. 1975), 70.

11　もっとも、「読者に」に出てくる「私」は別として、本文中の「私」が「ブラウン自身」であるかどうかにつ

いては議論の余地があろう。また、専ら自分のことだけを語るという「自伝」という形式は、アウグスティヌスの『告白』にも見られるが、アウグスティヌスは神に対して告白したのであり、ルネサンス以降の、他の人間に対する自己の「告白」とは異なる。

12 Charles Lamb, *Essay of Elia* (J. M. Dent & Sons Ltd, 1906 ; rep. 1962), 30. "C." は、S. T. Coleridge.

13 Joseph Seeman Iseman, *A Perfect Sympathy : Charles Lamb and Sir Thomas Browne* (Harvard University Press, 1937), 17.